

犬と旅する男



葉山ユタ

大学が春休みに入ってしばらくしてから、実家に帰省する事にした。

アルバイト先の飲食店がこの不景気で人件費を削りたいらしく、店長から、週に三日ほど入っていたシフトを、週一にしてくれないかと打診されたのだが、元々好きでもなかった仕事なので、それを機に辞める事にした結果、思った以上にひまが出来たのだ。

家に帰れば、母親や親戚がお小遣いをくれるかもしれないという打算もあり、俺は JR の切符を買って故郷に向かう特急列車に乗った。良く晴れた、行楽日和の暖かい日だった。

平日の昼だし、自由席でも空いているだろうと、タカをくくって乗ったのだが、春休みのせいか意外に乗客は多く、車両を一つ二つ歩いてみたが、自分一人で落ち着けそうな席がなかなか見つからなかった。

家族連れや友人グループの近くに座るのは嫌だし、出発前から革靴を脱いで、携帯片手にビールを飲んでいるサラリーマンの近くも嫌だ。席を向かい合わせにして、足を伸ばして座っているカップルの近くは言語道断だし、一人旅の若い女性の隣に座れるほどの度胸も無い。

おばちゃんやお婆ちゃんの隣は面倒そうだ。電車の中の三時間、興味のない他人のお喋りや、厚意のお菓子攻撃に付き合わされるのは苦痛だ。

三つ目の車両に入ってキョロキョロ席を探していると、椅子を向かいあわせにしている席に、一人で座っている若いスーツ姿の男がいた。

四人掛けのスペースに一人かよ、と思っていると、後ろから数人の家族連れがドヤドヤ入ってきたので、俺は押し出されるように、その男の向かいの席にはまってしまった。仕方が無いので、ここ空いてますか、と聞いてからギョツとした。

その男、一人だと思っていたのに、彼の足元には中型の茶色い犬が寝そべっていたのだ。

俺の声にその犬が頭をもたげ、フサフサした尻尾をお愛想程度に左右に振り、向かいの男も読んでいた文庫本から顔を上げて、静かな声で、どうぞ、と言った。

俺は、ちょっとびっくりしたが、元々犬好きなので全然嫌ではなく、むしろ嬉しいくらいでその席に腰を下ろし、足元に自分のボストンバックを置いた。

犬は俺の顔を黒々と濡れた丸い目で見つめて、ちょっと口を開けた。笑っているみたいだ。ヒト好きの犬らしい。

それは、少し長めの茶色い毛がフサフサしている中型犬で、ピョンと立った耳の先っぽの方が少し前に垂れていて、テリアと何かの雑種のような見た目だ。

赤と白のチェック模様の首輪をしているが、どういうわけか鎖もハーネスも付けていない。

盲導犬ではないようだけど、介助犬の類だろうか、と色々不思議に思う点が多いのだが、向かいの男は再び文庫本に目を落とし、こちらを見ようもしないので、流石に聞くのとはばかられ、仕方無く俺もキオスクで買った週刊誌を読むことにした。

しかし、漫画を読んでも、向かいの犬が気にかかる。介助犬のように仕事をする犬には、飼い主以外の人間が触ったりしてはいけない事ぐらいは知っているのだが、何とも愛嬌のある様子の犬なので、構いたくなるのだ。犬の方も退屈なのか、時々男性の腿に前足を掛けて顔を覗き込んだりするのだが、男の方は全く相手にする気はないようで、無視を決め込んでいる。

諦めたのか、今度は俺の前まで来て、窓枠に前足を掛けて外の風景を眺めだした。ワンともクンとも言わず、良く躡られている。

「いい子ですねえ」思わず、俺の口から言葉が漏れた。

男が本から顔を上げ、ちょっと意外そうな顔をしたので、俺は余計な事を言ってしまったのか、と少しドギマギしたが、彼はすぐ柔和な微笑を浮かべて言った。

「ええ、良く躡られています。賢い子ですよ」

改めてその男を見ると、品の良い端正な顔立ちの若い男で、スッキリしたデザインのダークスーツを着ているもののネクタイはしておらず、普通の勤め人とは何か違う感じがした。さっきまでは、冷たく話しかけづらいタイプと思っていたが、案外と気さくで優しい人なのかもしれない。

俺は緊張がほぐれて、ちょっと聞いてみようという気になった。

「あの...いいんですか？犬...？」

男は、ちょっと困ったように微笑んで言った。

「いいですよ。この犬は特別ですから」

「特別、ですか」

「はい」

丁度その時、俺達が乗っている車両に車掌が入ってきて切符の確認を始めた。俺と向かいの男性も、それぞれ切符を差し出してチェックをしてもらったが、車掌は犬については何も言わなかったので、なるほど、彼の言う「特別」を俺は信じたのだ。

「なんて言う種類の犬なんですか？」

俺が尋ねると、茶色い犬は自分の事が話題にされているのが分かるのか、俺と彼の顔を交互に見て、様子を伺っている。

「さぁねえ、テリアとラブラドルと、何かの雑種らしいですよ。あ、今はミックスって言わなけりゃいけないのかな」

男が犬の顔を見つめて答えると、犬の方は嬉しそうにその顔に鼻面を寄せて、尻尾をブンブン振り回した。しかし、彼のまるで伝聞みたいな言い方に違和感を覚えて、俺はまた聞いてみた。

「済みません、質問ばかりで。この犬、あなたの犬ではないんですか？」

男は、真っ直ぐ俺の目を見つめた。真っ直ぐ過ぎて、ちょっと怖くなるくらい澄んだ目だった。

「ええ、この犬は僕ではなく預かり物です。お届け物と言ってもいいですが」

「へえ…。そうなんですか」

これ以上、あれこれ聞くのはまずいだろうな、と俺が犬の方に視線を逸らすと、今度は彼の方から俺に聞いてきた。

「犬が好きですか？」

「はい、大好きです。昔、実家でも飼ってて。今はいないんですけど」

頭の中に、昔飼っていた黒柴の豆太の姿が思い出される。四年前、たった三歳であの子が病気で死んでしまってから、実家ではもう犬を飼うのをやめてしまったのだ。

茶色い犬が、俺の前にお座りして、じっと顔を見上げている。ああ、この子の頭を撫でてあげたいな、と思った。

「あの、この子、名前はなんていうんですか？」

「ジャッキーです。前の飼い主のお嬢さんが付けた名前だそうです」

「ジャッキーかぁ。確かにジャッキーって感じの顔してますねえ」

ジャッキーは自分の名前を呼んでもらって嬉しいのか、お座りしたまま尻尾をブンブン振っている。

「紅石（あかいし）の都通りという商店街にある、お寿司屋さんまで連れて行くんですよ」

彼が意外にも届け先について話した事に驚いたが、その連れて行く場所の名前にも驚いた。

「え？それって、若竹寿司ですか？」

「そうです。有名なお店ですか？」

「いえ、有名ではないけど、都通りで寿司屋っていうと、若竹さんしかないの。あ、俺の実家の近くなんですよ」

「そうなんですか。もし良かったら、駅を出てから、近くまで案内して頂けませんか？僕は、その辺りの地理には疎いもので」

「ああ、全然いいですよ。通り道ですから、店の前まで行きます。俺の実家は、その並びの写真屋なんです」
言ってしまうからハッとした。見ず知らずの赤の他人に、自分の個人情報ダダ漏れだよ！俺の心中を察したのか、彼はにこやかに自己紹介をした。

「それは有り難い。助かります。僕はツクモと言います。白と書いてツクモと読むのですが、白零一と言います。怪しい者でもなければ犯罪に手を貸す者でもありませんので、ご安心を」

「あ、ぼ、僕は、八重樫浩司と言います。大学生です」

釣られて自分も自己紹介してしまったが、何だか恥ずかしい。恥ずかしさをごまかしついでに、また質問してしまった。

「あの一、ジャッキーは若竹さんちの犬になるんですか？」

俺は若竹さんの大将と女将さんを小さい頃から知っているが、二人とも職人肌で仕事には厳しく、店舗兼自宅という環境で犬を飼うとは思えなかったのだ。

「うーん、ちょっと違いますね。実は昨年、若竹さんのご親戚で、事業に失敗された方がいらっしやいましたね。あ、これは他言無用でお願いしますよ」

白さんが顔の前に人差し指を立てて念押しした。

「あ、はい。もちろん、もちろん」

俺は、カクカクと首振り人形みたいに頷いた。自慢じゃないが、他人の不幸を吹聴するほど馬鹿じゃない。

「それで、家や財産を全て失い、親戚を頼って引越す事になりました」

「あー、そこが若竹さんちで」

「そうです。お子さん達が自立されて部屋が空いているそうで、まあご厚意に甘え、取りあえず親子三人、そちらに身を寄せる事になったのですが、流石に犬まではね」

「ははあ、飲食店ですしね」

「そうなんですよ。それで、仕方無く愛犬をご近所の方にお譲りしたわけですが、どうも犬の方が元気が無くなった」

「そりゃあそうでしょうねえ」

俺は、黒い真ん丸な目で俺の方を見ているジャッキーの不幸に同情した。愛犬を手放さなければならない人間も辛いだろうが、いきなり知らない人間の家に連れて来られ、見知った家族がいなくなったら、いかに人懐っこい犬でもショックだろう。

「何でも、前の飼い主のお嬢さん、あ、中学生の女の子なんですけど、その子の置いていったタオルにくるまったまま、じっとしているばかりになってしまい、これは一度会わせてあげた方がいいのではないかと思うようになったそうです」

「はぁ、今の飼い主さんがですね？」

「ええ、それで、僕が連れて行くように頼まれたんですが、生憎僕は車を持っていないので、仕方無くこうして電車に乗っているわけです」

「はぁ...」キャリーケースにも入らない中型犬を、ハーネスも付けずにね...。なんか納得出来ないんだけど、まあいいか...。

ざっと三時間を電車の中で過ごしたのだが、ジャッキーも白さんも、その間、何も飲まず、何も食べなかったようだ。俺は、ちょっと申し訳ないな、と思いながらサンドウィッチと缶コーヒーで、簡単な昼食を済ませた。

「あの、ジャッキーは、水とかトイレとか大丈夫なんですか？」

俺が缶コーヒーを飲み干してから聞くと、白さんは笑って、大丈夫です、とだけ言った。

その後俺は、満腹になったのと、窓から入る日差しが暖かく気持ち良いのもあって、まぶたが重くなり、そのうち寝入ってしまったらしい。誰かに肩を揺すられて目を覚ますと、白さんが着きましたよ、と声を掛けてくれ、俺は慌ててボストンバックを持って立ち上がった。

ジャッキーはリードも付いていないのに、白さんの左側にピッタリ寄り添って、尻尾を左右に振りながら通路を歩いている。本当に良く躡られていると感心しながら、俺も彼らに続いて電車を降りた。

ホームを出口に向かって歩いて行くと、向かいから来る家族連れの中の、小さな女の子が、ジャッキーの方に手を伸ばして、ワンワン、と小さく呟いた。ジャッキーも、その子の方を見て、嬉しそうな顔をしている。

白さんは、右手に小さなブリーフケースを持っているだけの身軽な旅装で、パッと見は日帰りの出張ビジネスマンのようだ。改札を通過して駅前広場に出ると、街路樹として植えられた桜の木の蕾はまだ小さく硬そうだが、良く晴れた午後の日差しは強く、ジャケット無しでも十分な暖かさだった。

俺は、白さんとジャッキーの前に立って、道案内を始めた。

都通りは紅石の駅前から歩いて十分ほどにある小さな商店街なのだが、表通りから少し引込んだ所にあるので、それほど賑わってはいない。いや、正直寂れている。何とかみんな商売になっているのは、昔ながらの馴染み客が懇意にしてくれているからで、その客層が代替わりしたら、もうダメだろうとみんな諦めている、そんな所だった。

都通りの入り口には、何十年も前に作られた、金属製のアーチがあって、上の方に剥げかけたペンキで「都通り」と書いてある。周りに飾られている、プラスチック製の桜や梅の花が、返って古臭く寂しい雰囲気醸しだしていた。

この時間は人通りも無く、物音すらしない寂しさだ。

「ここ真っ直ぐ行くと、青いトタン屋根の家がありますよね？あそこが若竹寿司ですよ。看板も出てるんだけど、見えるかな」

俺が左手の方を指さすと、白さんが目を細めて、ああ、ありますねえと言った。そのままのんびり歩いていると、向こうの方から制服姿の女の子が、自転車に乗って走って来るのが見えた。

すると、さっきまで大人しく、一度も鳴くことが無かったジャッキーが、突然大きな声で、ワン！ワン！ワン！と三度鳴いたのだ。その女の子はすぐさま自転車を止め、周りをキョロキョロと見回しながら、ジャッキー！と犬の名前を呼んだ。

ジャッキーは、地面をその足で強く蹴ると一目散に彼女に向かって突っ走って行った。

ダッシュするジャッキーの後ろ姿を見て、ああ、あれが前の飼い主の...、と俺は感動的な再会シーンに立ち会える喜びに浸ろうと構えていたのだが、何とした事か、彼女に向かうジャッキーの姿が突然霞み始め、そして彼女のすぐ手前で全く見えなくなったのだ！

「ええええっ?!なに?何で消えた?」

愕然とする俺を尻目に、白さんは静かにその女の子に歩み寄った。女の子は何が起こったのか分からないようにキョトンとした顔で白さんを見ている。

「君は、佐々木麻衣子さんですね?」

「はい、そうですけど...」

女の子は、白さんに生返事をしながら、まだ周囲に犬の姿を探している。

「犬の声が聞こえましたか?」

「え?はい...。前に飼っていた犬の声かと思ったんですが...変なの」

紺のブレザーとプリーツスカートを着たセミロングの髪の少女は、上気した頬が桃のような、可愛らしい子だった。

「その犬の飼い主さんから、君に渡すよう、頼まれた物が有るんです」

そう言って、白さんは左手に持っていた、赤いチェック柄の首輪を差し出した。女の子は一瞬息を飲むように固まったが、ゆっくり自転車を下りて、その首輪を握りしめた。

「ジャッキーは...?」不安気に尋ねる。

「残念だけれど、先週病気で亡くなりましてね。飼い主の方も、病院に連れて行って親身に面倒をみたのですが、重い病気で助かりませんでした。君とジャッキーは、とても仲が良かったようなので、知らせるのが心苦しかったのですが、ジャッキーもあなたに会いたかっただろうと、せめて形見にこれを渡して欲しいと頼まれたのです」

女の子の顔が見る見る歪んで真っ赤になり、両の目からポロポロと止めどなく涙が溢れ出る。

白さんは、彼女に自分のハンカチを手渡して、優しく語りかけた。

「あの子も最後に君に会えて満足したのでしょうか。もう虹の橋を渡りに行きました」

「に...虹の橋って...？」嗚咽で声にならない。

「人間に飼われていた動物達が行く、天国への通り道ですよ。さあ、あまり悲しんじゃいけない。ジャッキーが心配するからね」

麻衣子と呼ばれた少女は、泣きながら白さんに頭を下げると、形見の首輪を握ったまま、若竹さんの玄関脇にある通路へと自転車を押して行った。

白さんは、先ほどと全く変わらない落ち着いた態度で俺の方を振り向くと、ニヤリと笑った。

「ありがとう、お陰さまで無事仕事が片付いた」

俺には、今見たことがさっぱり理解出来なかった。

「ええっ？ちょっと、待ってよ！一体全体、どういう事ですか？ジャッキーはどこに行ったんですか？」

白さんは、右手の人差指を空に向かってひょいと立てた。

「まあ、あっちの方、かな」

俺が今まで見ていたジャッキーは一体何なんだ？！呆然としている俺に、白さんが言った。

「まだ分からないかな。君が見ていたのは、生きているジャッキーじゃないんだよ。どうせ誰にも見えないだろうと電車で来たのに、相席になった君にはあっさり見えていたんでびっくりしたよ。しかも、生きている犬だと、頭から信じて疑わないんだから」

白さんは、胸ポケットの中からタバコとライターを取り出すと、一本啜って火を付けた。電車の中は禁煙だから我慢していたのだろう。深く一息吸うと、白い煙を長くゆっくりと吐き出した。

「じゃあ、あれは犬の幽霊...？」

「列車の中で、この犬は死んでますよ、実体の無い存在ですよ、なんて言えないから黙っていたのさ。ジャッキーを引き取った家の家族が僕の知り合いなんだが、ジャッキーが死んでからも、家の中でタオルを引きずって歩きまわる犬の気配を感じるから、成仏していないんじゃないかと相談されたんだ。それで行って見たら、どうも前の飼い主の女の子に会いたいけど、どこへ行っていいのか分からないので、ウロウロしてたんだな」

「それで、ジャッキーの幽霊を連れてきたんですか...？」

「物理的には、形見の首輪を持ってきただけだがね」

白さんは、何でも無いことだと言う様子でサラッと云ったが、俺は、あんなにはっきり見えていたジャッキーの黒い目や、フサフサした茶色い毛が思い出され、それが現実のものでは無いと言われても、どうしても頭が付いて行かなかった。

「そんな...だって、俺、靈感なんて全く無くて、今まで幽霊なんか一度も見たこと無いのに、信じられないです...」

「たまたまシンクロして視えただけかもしれないから、そんなに怖がる事は無いよ。それより、八重樫君、君は昔、黒い柴犬を飼っていたんだね？」

俺は心臓が止まりそうなくらい驚いて、体が震えた。そんな事、この人に話していないのに、どうして分かるんだ？

「その黒い柴犬君は、君の家の居心地が随分良かったようだよ。また、君や君の家族と暮らしたいって思いながら亡くなった」

「豆太が...？本当に？」

あいつが病気で死んだ時の事を思い出すと、今でも胸が苦しくなる。母親はすっかりペットロスになり、彼女の、もうペットは飼いたくないという意見を尊重し、実家ではこの四年間、金魚一匹飼っていないのだ。

「お母さんは、また犬が飼いたくなってきたみたいだ」

「え？母さんが？って、何なのアンタ？俺の心、読んでんの?!」

俺は、心を読まれないよう、自分の頭や胸の辺りに、両手をかざしてジタバタした。白さんは、それを見て、ハハハッと乾いた笑い声を上げた。

電車に乗っていた時の、上品で物静かな雰囲気は微妙に変化し、切れ長で人の心の底まで見通すような眼差しが妖しく輝いていた。やっぱりこの人はどこか怖い。

「兎に角、早く家に帰りなさい。黒くて可愛い子犬が君の帰りを待ってる」

「ホントに？ホントに子犬、飼ったの？」

「そうさ、四年待って、やっと生まれ変わったのさ」

白さんが俺の目を見据えて、真面目な顔で言った。

「生まれ変わり...」

その言葉を聞くと、俺は居ても立ってもいられず、それじゃ、と白さんにぞんざいに挨拶して家に向かって走りだした。黒い子犬、豆太の生まれ変わりだなんて、本当なのか？！

白さんが微笑んで、片手を上げたのがちらりと見えた。

俺が実家の玄関のドアを開けて、ただいまっとな声を掛けると、廊下を小さな生き物が、パタパタと走って来る音がした。

靴を脱いで廊下にしゃがむと、コロコロした黒い柴犬の子犬が、キャンと一鳴きして、俺の懷に飛び込んで来た。

「豆太！豆太だ！お前ホントに豆太なのか～？！」

暖かくて柔らかい子犬を抱き上げると、そいつは俺の顔をペロペロ舐めてきて、俺の顔はヨダレまみれになってしまった。母さんが台所から出てきて、ニコニコ笑っている。

「ああ、お帰り。早かったねえ。どう、この子？豆太そっくりでしょ？」

「だって、豆太の生まれ変わりだもん」

「はあ？」

「それより、母さん、ペットはもう飼わないんじゃないかなかったっけ？」

「ウン、そう思ってたんだけどね、先週ペットショップでこの子を見かけた時に、目が合っちゃったのよね。人懐こくて、豆太そっくりだったから...父さんも、豆太だって言うのよ」

「じゃあ、名前は豆太だよ」

モコモコした子犬の前足を握りながら、俺は白さんに言われた事を思い出していた。何とも奇妙な話だ。

白さんは不思議な人だったなあ...あの人は何者なんだろう...

「おい、今度は長生きしろよ、豆太」

俺は、豆太の頭を撫でながら呟いた。虹の橋とやらを渡るのは、ずっとずっと先でいいからな。豆太は無邪気にピンク色の小さな舌を出し、黒豆のような丸い瞳で、俺の顔を見つめていた。

この作品はブログ「[白嘘物語](#)」に連載していた小説を、加筆修正したものです。

お読み頂き、誠にありがとうございました。
尚、ブログは2011年12月に別のアドレスに移行しています。
新しいブログは「[白嘘物語-つくもうそ物語](#)」です。



【犬と旅する男】

<http://p.booklog.jp/book/23326>

発行日：2011年3月26日

著者：葉山ユタ

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23326>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23326>

白零一の物語

【[夢違え - ゆめたがえ](#)】

【[長足王と長耳王](#)】